

# 文学的コンピテンシーを育成する 高等学校古典学習の開発的研究

学 籍 番 号 219310  
氏 名 森島 千晶  
主指導教員 土山 和久  
副指導教員 堀 淳一

## 1. 研究の背景

平成30年改訂の学習指導要領に明らかであるように教育の場において、「資質・能力」の育成が求められるようになったが、それは文学教育においても例外ではない。筆者は学部時代、作家や時代の背景を踏まえてテキストを読むことや自分なりの解釈を考え、それらを仲間と共有することによって古典文学特有のテキストとの関わり方を学んだ。このような授業を構想・実践することは、従来の古典の授業とは異なったものであり、古典教育の新たな可能性を見いだすことにつながるのではないかと考えた。本研究では、文学に関わるために必要な、もしくは関わることによって育成されることが期待される「資質・能力」、すなわち文学的コンピテンシーの育成について高等学校の古典学習において実践的に考究することを目的としている。

## 2. 文学的コンピテンシー育成における理論的枠組み

現代の文学教育において、文学を「読むこと」の学習に表現活動を取り入れることは重要視されているが、文学を学ぶことによって身に付けることのできる「資質・能力」については不明瞭であることが分かった。そこで、文学的コンピテンシーの議論が我が国に先行して活発に行われている、ドイツの文学研究者である Spinner (2006) の“文学に関わる学習 (Literarisches Lernen)” や、土山 (2021) にみられる「文学営為」を文学的コンピテンシー育成の理論的枠組みとして据えた。

## 3. 基本学校実習における研究の概要

基本学校実習Ⅱにおいては、「和歌」の単元、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』を題材に、「和歌にBGMをつける」活動を取り入れた実践を行った。この活動は Spinner (2006) の11のアスペクトのうち、「(1)読んだり聞いたりする際に、表象を展開する」「(8)意味形成プロセスの不確定性(Unabschließbarkeit)と関わり合う」「(9)文学の話し合いに習熟する」の3点に注力し、また「文学営為」の「加工」と「仲介」の視点を取り入れた。生徒作品を分析したところ、「和歌にBGMをつける」ことによって学習者は、和歌に対して多様な意味づけや価値づけを行っており、この活動はテキストと学習者を結び付けることに有効であったと考える。またその意味づけや価値づけは「加工」や「仲介」の目的意識によって異

なり、学習者はこの活動を通して多様な解釈の可能性に出会うことができたろう。

#### 4. 発展課題実習Ⅰにおける研究の概要

発展課題実習Ⅰにおいては、『竹取物語』「かぐや姫の昇天」を題材に、「物語にBGMをつける」ことと「なりきり音読」の2つの表現活動を取り入れた実践を行った。この活動はSpinner (2006) の11のアスペクトのうち、「(1)読んだり聞いたりする際に、表象を展開する」「(2)主観的な関与と精確な知覚を連動させる」「(8)意味形成プロセスの不確定性(Unabschließbarkeit)と関わり合う」「(9)文学の話し合いに習熟する」の4点に注力し、また「文学営為」の「加工」の視点を取り入れた。本実践から、「なりきる」ことは、テキストへの知覚を高めることに有効であり、また「物語にBGMをつける」活動においては、テキスト理解に音楽を用いる意義や「加工」することによって生じる解釈のコンテキストの拡張をみることができた。また「表現すること」が「読むこと」に影響を与えていることもみることができた。

#### 5. 発展課題実習Ⅱにおける研究の概要

発展課題実習Ⅱにおいて、『大和物語』「姨捨」を題材に、「伯母の立場に立って男への返歌を考える活動」と「「姨捨」が読み継がれている理由を考える活動」を取り入れた実践を行った。この活動はSpinner (2006) の11のアスペクトのうち、「(4)文学の登場人物の視点を追体験する」「(8)意味形成プロセスの不確定性(Unabschließbarkeit)と関わり合う」「(9)文学の話し合いに習熟する」「(11)文学史の意識を展開する」の4点を取り入れた。学習者が作成した返歌作品例をみると、物語に描かれていない部分まで多様な意味づけを行っていたと言えるだろう。また物語世界に合った表現を行うことは、これまで受け身でしか古典に関わってこなかった学習者にとって古典文化を体験する新鮮な場となったと考えられる。またこの作品が読み継がれている理由についての生徒の記述から、作品によって古典と自分自身や社会を関連させることの難しさをみることができた。

#### 6. まとめの考察と今後の展望

今回の実践はすべて表現活動を起点とした「読むこと」の授業であったが、表現活動を取り入れることによって、学習者と距離のある古典テキストをつなげることを可能にした。また受動的にテキストを読むのではなく、物語世界を自分の頭の中で作り上げ、その世界と自分自身を融合させながら作品に意味づけや価値づけをすることといった学習者自らが文学と向き合う意識を働かせることにつながったと考える。したがって「表現すること」と「読むこと」が絡み合うことによって、学習者はより文学と関わりながら読みを深めることが可能となり、それに伴ってコンピテンシーを発揮させることにつながったのではないだろうか。また古典テキストの特徴として特に「象徴性」や「継承性」「物語設定や構図のシンプルさ」が挙げられると考え、これらを有する古典テキストと向き合うことによって、学習者は文化継承のダイナミズムに身を置きながら、多くの解釈可能性と出会うことができることができると考える。しかしながら高等学校の文学の授業において、文学的コンピテンシーの視点を取り入れた授業を実践するには、カリキュラムの整理の他にも、受験との折り合いや評価の問題、小学校や中学校との系統立てた表現活動の展開等の課題が挙げられる。